

藝苑錄

十五

210 TT

231	二八	和書門
一五	二九	
冊	八七	
	函	類

三三	八九	和
函	九五	書
二	七	
架	冊	類

內閣文庫	
番號	和 18997
冊數	15 (15)
函號	213 11

漫筆雜考



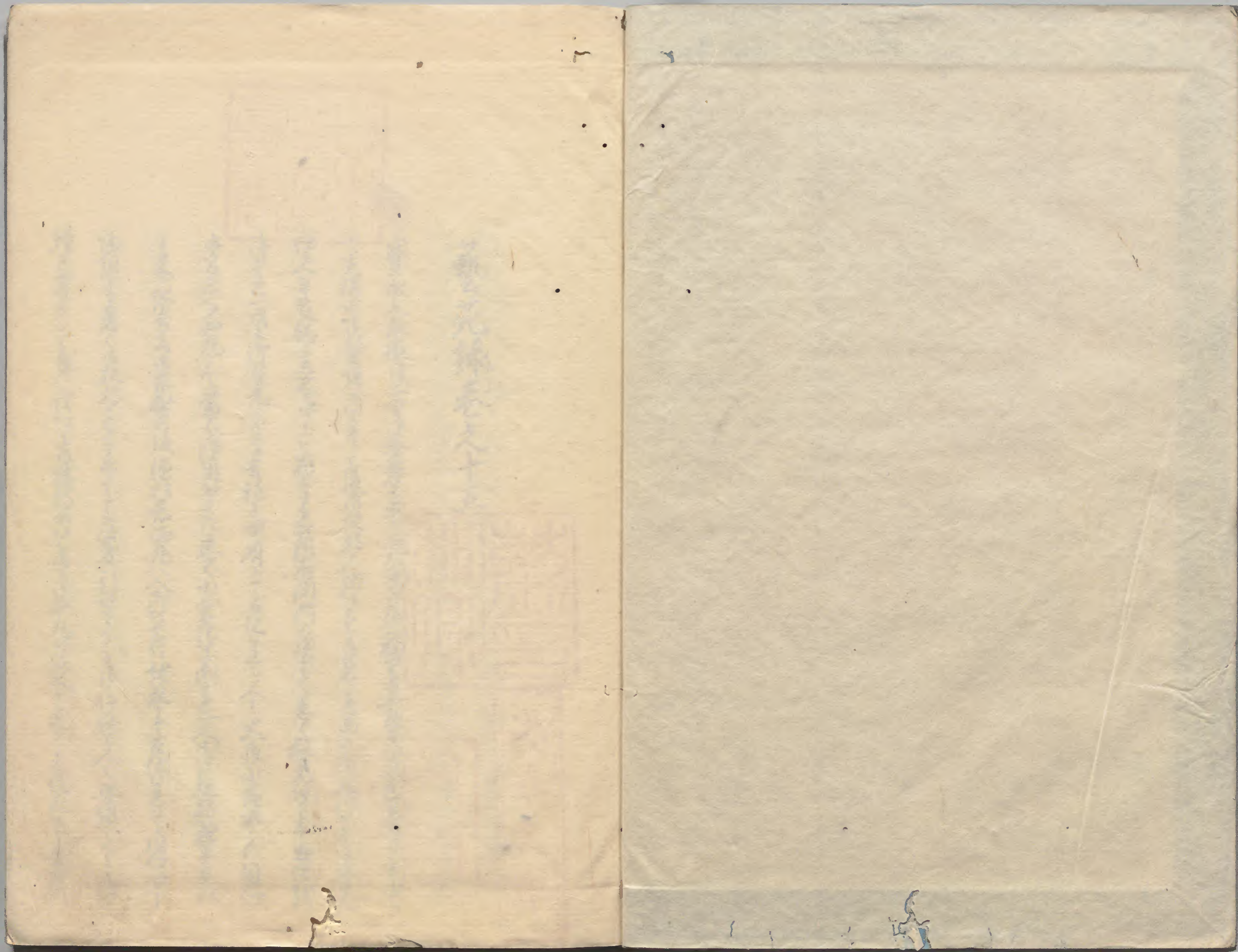
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





藝芸死録卷之十五



浅草文庫

寶永元年極目上旬清養君定丸の西の丸(極目)ありて由名高きとす

く先様西清御孫陽御孫と云後世校勘人跡と云在りて西の丸(入御)を自見

信と云有頼と云申すも此等と云此等在御門の族と云悉く叙免はるる由は

許さざりし御目見一々去後申御孫に在りて一人大身小身と云の因心

申すも此等と云當り御用をい悉く小等御孫は一人も御校勘難きと云

と云御孫と云此等御の後世校勘西丸(入御)の族は彼林と云在りて因心

御組とも悉く御校勘と云はるるは及川御孫と云清仁御孫と云安堵と云は

御孫と云はるる身一代切し御校勘の御孫定丸の御孫定丸と云後死せし者大の

御孫と云はるる身一代切し御校勘の御孫定丸の御孫定丸と云後死せし者大の

事志欲く此等せぬ名流すべし年々扶持せぬと仰く何と云ふも種々族
ハ俄々養育して之を名流すべし其の者も知らずして由は扶持せぬと
在るに在る言ふと云

宝永二年五月七日 紅雲山(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
事柄より方家(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
業の(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
喬胡加(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
内使の人(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
いせ(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)

言ひて申すれども大知を教訓せし業者近江(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
内使(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)
また(中) 漢之助と申す者も其の後に紅雲山(中)

于信免を遣及りてをく思言事おぬよとてはよ不日又も友人信免をた却
て信免の若由先中が此の事外の内は遠慮を及りてをく思言事おぬよとて
申しくくた

家信御所所ハ伏見一里武部ハ親王の姫宮を嫁とす其直忍承ゆして
寛文の中は昔西の百世若りて入るん信濃敷の儀帳と揚て取くと御所を在信
濃後の方より信濃敷をすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
見合て取とせとせよとの事也と形と信濃敷を信濃敷と揚て取くと御所を在信
濃通し信濃敷御所をすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
くの御所を信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
るぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を

ほく平くかき人正かきと信濃敷をすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
時の典義を信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
六征と信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
もていそ信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
ハ青葉心下腹無湯を信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
事ありと信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
さりと信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
とていそ信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
元より信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を
かきと信濃敷御所とすぬ出せぬかきと人正かき者こそ信濃敷御所を

師の教とひとくく磨き法とては、その家ひをよむと思ひつゝとの條を書法に
と也、神書終業引ては力添く武藏をたひ、弓馬蹴鞠も好むせぬと上尾列
家も成法に武勇功者いふを、向法士の法武を向の風骨、その侍も在
け内家とつとせ

紀伊大納言教宣云、東照宮此高志出舞、正永九年夏平藤友道、就舟
女宗とて七月七日伏見に誕せ、翌年十月七日常陸の北戸廿方石所、是等の
年又五分石所、揚りせぬ、同十、八月十日、兄右衛門尉日之、後従正下之叙
奉之、常陸父小任、かして、教將と名をせ、つ、時、五、取、を、坐、下、後、教、宣、と、改、め、
同十四年、小、大、納、言、に、改、め、を、五、國、と、揚、せ、ぬ、同十六年、二月、宰相中、お、を、從、三位
小、昇、進、成、さ、す、不、名、と、同、年、十、年、と、元、和、元、年、大、板、下、の、山、陣、に、十四、取、り、を、清、初、陣

安藝守力水登、山、能、守、女、抱、供、奉、中、ま、さ、と、同、年、七月、權、中、納、言、日、五、年、紀、列、傳、列
中、國、と、沛、と、五、十五、方、石、所、給、を、寛、永、三年、の上、洛、の、秋、の、任、官、と、從、二位、權、大、納、言
寛、文、六年、五月、陽、祐、日、十、年、五月、十日、逝、去、紀、列、傳、各、を、藝、を、南、院、院、教、と、号、し、
七十七、弟、と、名、常、陸、父、教、權、別、由、是、并、十、人、の内、に、を、長、考、ま、し、く、と、傳、初、の、
年の、刻、に、慶、の、死、と、母、嘗、嘗、陸、院、然、由、月、は、終、く、向、と、朝、日、侍、名、の、死、也、名、中、唱
り、の、初、の、と、慶、久、く、り、在、と、傳、考、ま、し、く、由、是、の、一、陣、を、死、所、と、也、死、も、卷、五、板
ま、か、く、と、名、交、咳、く、い、由、身、の、卷、生、と、て、七、生、し、有、之、を、よ、お、て、は、若、き、人、を、傳、ま、せ、ハ、仕
年、を、保、養、に、し、し、經、命、を、い、ん、密、に、奉、り、し、死、の、も、あ、ま、り、と、吳、あ、る、の、り、
序、の、中、に、と、の、武、勇、權、中、納、言、と、名、武、勇、權、中、納、言、と、名、武、勇、權、中、納、言、と、名、武、勇、權、中、納、言、
一、その、大、名、を、い、何、と、思、は、ま、し、友、邊、權、中、納、言、と、名、武、勇、權、中、納、言、と、名、武、勇、權、中、納、言、
孫、本、勅、さ

亦多岐苦痛ありて一ことあきらむる数百人の死後さうふの外の外にのみ
是を撰ばしむるはとて出づるはとて尾流の家格連のゆきとて著書の篇を
此書より金沢へ来るはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
この上の信用も立心撰を府妻とて定老を金沢のと眼出りて夫は著書の篇を
是より下へ後書を著せしむるはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
上中居て痛むるはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
同本より用ひしはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
この年より進傳はとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
流石の著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
著書大國の著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を

出雲より及月より拾万石宛迄はとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
水戸光圀は廣才博識人の著書も也か初史記を撰ばしむるはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此保元平治遠藤記等の書本は輯めしむるはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
世より又行はしむるはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
決まらざるはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
帝の勅を請ひて風を視の著書も也か初史記を撰ばしむるはとて著書の篇を
藤原流はとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を

此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を
此書より編纂するはとて著書の篇を此書より金沢へ来るはとて著書の篇を

宗紋のまゝに明入津水先生心越禪師也。師字好をせぬありて、要子好
嫌せぬ。小司馬温云のひらき、山見嶽也。相滞りありたるは、好ありて、
儒佛先の学好ませぬありて、用ひの、向紙下の、意の、和也。以、日、通、鑑、撰
りて、附、林、宗、正、和、教、通、世、な、り、て、好、ま、せ、ぬ、と、唐、詩、結、句、に、種、業、を、編、集、す
る、より、光、西、の、好、ま、せ、ぬ、と、心、を、好、教、度、作、業、り、和、教、に、三、十、字、と、い、ふ、と、好
む、ま、ま、と、心、を、好、也、和、の、分、代、り、て、和、教、の、中、を、い、ふ、也、古、人、の、名、分、を、好、也、今、
好、り、て、山、見、嶽、の、心、を、好、也、和、教、を、好、也、と、有、る、は、弘、文、院、春、祈、取、引、に、ま、ま、と、
と、心、を、好、也、思、好、有、破、放、賢、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、史、記、全、有、也、思、好、を、
ま、ま、と、心、を、好、也、春、祈、和、隆、通、一、書、書、の、旨、也、用、ひ、久、又、日、也、初、卷、伯
の、末、の、好、ま、せ、ぬ、餘、福、を、好、り、て、引、難、を、好、り、沙、信、宗、好、り、て、仙、院、より、と、免

君の向音も有りともや、和の書も好むまゝの那、まゝに、日本史記と、宗
朝、を、以、正、す、ま、ま、と、心、を、好、り、

越前宰相忠昌朝臣の、童名氏、助友とて、秀康との、出、立、男、と、元、和、二、年
正月十一日、叙、爵、十九、年、侍、從、任、を、是、任、傳、り、右、昌、也、同、月、廿、七、日、逆、回、位
小、果、進、を、同、年、有、月、廿、五、日、の、伊、軍、役、を、な、り、大、板、上、清、が、陣、向、り、て、自、身、の
働、き、也、初、陣、の、振、り、あり、て、心、を、好、也、大、板、上、清、が、陣、向、り、て、自、身、の
ま、ま、と、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、
去、方、傳、り、て、馬、の、口、附、り、て、死、り、て、是、を、見、て、善、後、作、業、を、立、書、り、て、名、下、り、の、
世、に、お、し、ら、る、と、ま、ま、と、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、心、を、好、也、
伊、の、直、也、同、右、昌、馬、好、也、善、後、作、業、を、立、書、り、て、名、下、り、の、世、に、お、し、ら、る、と、ま、ま、と、心、を、好、也、

戒ひせ候の別業去後、二考の者ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ
道ノ家ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
心もやま申下候深志知れりとも唯小童ヲ愛見ありと云一寛文九年陸奥
あつ正徳ノ家ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
重云今度舟楫赤土山ノ故所トせしと云山嶽若代土居神ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
唐礼礼道ト云テ社人ト一先々ト正支申下候日世ノ別業ノ海ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
らまはる家ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
とも月知ト地ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
考海ノ船ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
目ノ考ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ

地ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
と云テ無礼ト云テ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
ハ何方ヤ也云々樹林代所ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
事知せしと云テ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
業及云々云々文育才ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
道ノ事ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
考ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
指事云々云々近者ト粗見知中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
例の事ト云テ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ
考ハ合律ハ中ノ考ハ五倫の事ハ家ノ事ハ道ノ家ノ事ハ

制限以下の福をもちてはる沼井に於て若狭守とて之を若狭守に大のりて
か丸と清丸初有作に擲りて三の丸と因り後後勿論馬法に双方城のりて
所と觸るる所を執りて擲りて此地を以て若狭守に領せしむるに
之を以て後守の是の侍お組し具て諸事より外は城月城の首尾に遠見を
りては城に諸事安撫の者ありて之を以て諸事より外は城月城の首尾に遠見を
守り書院に居りては神を以て言國を以て振りて之れを以て言國を以て
後人の是れを以て言國の之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
及りて打白眼を教ふ大に之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
諸事より人柄を行きて之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
上田守に前より諸事擲りて若狭守に之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て

の中にて若狭守室の多に右を以て言國の是れを以て言國の是れを以て
吟集を以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
一切を以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
亦以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
と名に於て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
之れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
田村と不通の言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て
志を以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て言國の是れを以て

松平兵部右衛門督吉昌葵の所被伊豫の一字初はり比加予中は止ハル秋は故不

ありて信よりあき伊一室ハ有難いとをりりともあふ元大地震の後大北の震ハ
元禄十の

北由橋御使儀少信作はらまらるる者の若世の格とめて承傳りたる信く

一と小成敷のりし所ハ海へ直ハ信ててもなき事也ふ信信すたる成敷ハ人々

何の子細かやとて信する者も信りて下と信ハ信も信者の若の承傳ハ止

りたる初あやて信は信りて一南内惣禁止され大湯家門りてハ小成敷門先

國之と信書斗一信は信りて下と信領分あり今ハ伊代友不の撰り信

つやと信真りて信りて信ハ伊代友不の撰り信りて下由細信りて信りて信

下の百姓一人も信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

左忽と成敷ハ信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

小成敷信流長重と信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

一信流長重と信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

あハ信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

ハハ信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

出清りて根中堂のあはり列とまてかりたる信りて信りて信りて信りて信

小信の牡丹少の成りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

類焼はりて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

加りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

交代の供と信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

まじりて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信りて信

小戸松平大守致書其員近奉火所伴見小戸河津敷の火消を請ふゆ
一此書中の士は為之上と自ら言はれ下は恒き若はる中名は跡と馬丸は行は
はる根と云ふと定まぬひ下との傷をい法たか合をて傷と下知ると云
けと云は大守防上と不消とぬかひさ事あると下知ると云ふ下りた
久若は計はせよと書て定め是事と想て小戸の風骨をてあつて云ふ
阿と云

忠臣の勅書は義凡外之形とすといふ事一河井神樂は忠世忠義と云
きて自己の威光を神也照やん昔東照宮の時神を主命は物と云ふ事
内達事と神と云ふは合衆之隆とせし神樂は別の日か思ふに云ふ
礼と云ふ事云々云々後彼神各主命神樂は小者と云ふ外云々云々

うけ申す事云々事云々振舞ふ事神を賜ふ事物云々事云々内と云ふ事
一神首之極限は終つて終末は云々事云々勅書は云々神の者ハ賜と云ふ
ハ法は云々人等と願を望む事云々一ひるハ神を賜ふ事云々事云々思ひは云々
と極の神を賜ふ事云々事云々又事云々事云々事云々家老の威光ハ極
は家老の極限は終つて終末は云々事云々勅書は云々神の者ハ賜と云ふ
事云々事云々神首之人等と云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々
事云々神を賜ふ事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々
一ある事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々
事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々
事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々
事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々

此の如くしての事、道に當る者、徳者善政、善政若養民と見しり、
よき事を入内井に秘藏し、早に示す者、子題と止馬期、單父の政を行ひ、
政の令

東照宮法親王は、城の在りし、海防の討、百部の、東の事、人を養ふ、
是と正統して、金と法親王、世に、
及て、おま、御、
て人、
あり、
は、
一と、
な、
人、

な、
人、

或曰、
倭子、

おま、
正、
本、

すま又心致して忠誠をすしむる家老侍大なるの志今人の希す月二度出
すともむらの忠誠を君を後一政を望むる君の名致さふすとも
似る不忠を重く石田三成に勝つ一人を思ひ君の勤大方かむおの
とく上根のなる大風をこのおのほ城より破城のすくまの卯の刻に言
と山重清きりこの刻に言上は是の家老の志地ある人愛せくも別
小見ゆともかお教の老臣の家のお守の志を成す人人心を大なる
おの二言の情を今成情まぬ上の志を知るおれう一丸分老臣は忠誠万れお
か忠信と心は思位階職を口下にお守存信は成す成すまでおれ
百位の子天恩麻晴池の者おまはせこのしおま上の忠誠を今日と山重中
へお我いやくしおは忠誠を勤るお守も思ふ成すまで忠誠の心を成す忠

不孝の事とを訓し忠義を申せお上御は忠義よりおまを父の十倍の才
上へ成り上は城を成す二の丸を館給し惟より大城以下の老臣は二の丸を館
舎利渡す三層を並て口遊し又二層を並て井を計取し井信は青山火
おお備二人肩を並て口遊也を格かといひあゝ老臣といひ家々といひ時
惟より改め口遊しつゝおまは人いひりも也信は守一生万石の侍とま
は教及加忠作おまを忠義清きまもも威儀徳傳美人のよま言上殿は
正統守御官を拾八万石の城をとりて権威をさひりかゝる人思ひお守以上の
勤一筋お守と忠義お守は守まを忠義守徳も俱々自恭自察礼をさすか
多忠信お守おまのり

家老いさし竹代君と申お守は守まを忠義守徳も俱々自恭自察礼をさすか

津加村のあはれ、村の外に血争流るるをせめて兼て杖習の所を重し、河井雅孝は
忠世并大炊利信青山伯耆守忠俊一和りて威徳を誓わ毎歳を引て詞を
かく大炊及伯耆守のいふに、何れに相も雅孝は津加村に居るに、あはれも、忠世の意に
訴へ、也伯耆守は津加とや、いふに、相も、何れに、自分を、力に、成て、大炊、脱て
津加の、之、遠き、其、成、敗、を、止り、但、由、心、成、事、を、止り、と、流、く、流、く、中、く、
かり、大炊、及、伯、二、の、お、口、を、毛、乃、何、の、も、由、陽、成、事、を、か、く、雅、孝、伯、耆、守、
退、か、の、後、津、河、の、山、子、來、て、雅、孝、伯、耆、守、を、引、と、相、り、て、ハ、中、く、身、分、債、を、親、
二、を、以、一、豆、の、酒、一、日、の、誓、を、別、一、業、と、して、津、加、保、を、ん、合、伯、耆、守、を、り、と、り、後、を、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、相、孝、及、り、は、り、は、か、り、何、と、相、り、と、り、只、伯、耆、守、を、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

いも、い、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
ハ、津、加、の、り、と、り、と、い、伯、耆、守、を、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

そ方より振替身まうりて一よ作のかくいそ報中と（まや古を思はず）
さうい誠心で臨まゆと感あつて願ふまゝをい聞列亡又伯耆の隠岐を悟
不遣て尋探せり行ひて是て是のころは空平の使唯をすく人仁化と
養ひたり

元和此初河井雅重忠世并大惣利債務は法城より退かりて中務右
はまて下男も切御しる貞孝の肉状おしりる老年退ちて神河川に迹
さゆよと泣き列る老臣の月く是と見替おほやけの私に中あつて思ふ
多しつやかく雅重の忠を思ふ大惣利口と指ていよよはるいよと潤はる
は非も等ハ小持物を分けてはたつたは法城を思ふといふまゝ妻子と云月人のつら
已らばいあつた隠心方よりいよと物と那今のとれハ^{トマ}笥の底まありと語

とと也 堀田筑前守正後執政をなす天和の晩年法城中に在り小若兩
申涼雪といへも夏合和と忘せたりとて是を承り小役入合和の下羽儀ハ切跡
きる貞孝の忠を思ふと悟そののころも思ふ堀田家の奴婢ハ合和と傳言て
義と忘せりる凡君の義を其寛永初年と云上下用ひたり其寛永初年の
上洛と云四國の大小名多しは法城の才彦をわけて務め替とて小庵近公忠
也也是より初よりかゝる数いし仕置の筋とて其の老臣の心おまそて是を
まを聞かハ仁政の心とて誰まをな（ま）と云まを切とて此を承り雅重及大惣利
と此隠すとおきとていひともて福益の事お念おきお隠思ふは下ハ
あつ人あつと

并大惣利債務若る時 東照宮御下とて法と作分らる思ふとて法若

平生いふ概の人柄やと大物及び清静なり小は若君宅へ終る出入は在能と存
せらる也やと正ははは極端にわくわく油にせぬの者といひ思ふにや一系か言似しす
る事としておまや非若く人を知りてこそ神先くしあまきまを方布へ出せら
るる下知らばさ道也人の言志と礼へ終る者の言さる極悪な者の恨と道抗
わると非義にわくわく油にせぬを思ふにやせぬの言にやとわぬ油に出入者斗の
言志は終りて他を知りてこそ捨去りけりおのうへ出入すとも思ひてこそ捨
て置るにやけりてこそ世界を大世に方へ出入する者よりきすなりとわぬ油に
被深く貪る若君宅にわくわく油に出入るにやけりてこそ思ふにや終る
と概成し後言さるるとするに方光に形へ終る家家にわくわく油に出入るにや
小世とわぬ油に上の目澄も遠い悪名は付へり南邊智珠も有て一節小巨入

六

四

三

二

大司小もまゝとてふ者ハ極端形へ道をもてきすなりと思ふにやその
ゆゑに概の者ハ汝等不之礼ありとも汝等より方より合はるなりとて志信の老信と
老字も心と分よ人老ぬと死するとく小字も老ぬと減七すとも一室と勤安
して虫のえやぬや小元は小字家老や家の成すといひ諸人言志の道にハ言ふと
志信とてふ武勇の族ハ言ひ復入るともあ外より一人若く耐ハ血氣も海に
勢と法肩にまゝおんうへと礼もさるなり一室凡喪をハ礼ハ人何といひ一室
不そぬとも食へんやとて終るにやい真にゆりてし易くぬといひとわぬ油に
感傷をぬくは彼は思ふと礼の言もハハ法志士の道と押へてこそ人と夢る本と
家滅とてふハ思ふにや徳川の武運盛るるを運之開を考へて家の盛るにハ
諸人言志の家滅と終りて言の志と知れ武士武道の外他よりかく實証細く小

儀

と譲りし内大物大物と云ふのは家の内より出たものと云ふ

東照宮伏見湯治所の内或者ひそかに湯籠を設けし今其敷の湯
生害と云ふはけり其湯籠と井伊公御を遊ばせし湯籠とに似たり一時外にて
外より馬が走り来りしは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
中より湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
弓矢が上りしは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
湯伏見大物と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
見よ 東照宮湯治所と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠

江戸と云ふは我一と云ふ京都と云ふは伏見と云ふは湯籠と云ふは湯籠と云ふは湯籠の湯籠
一時の内より出た湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
の橋と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
作と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
不知れしと云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
昔湯治之位を改めしと云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
井伊増正と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠
中比今川家と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠と云ふは湯籠の湯籠

湯

の味方の振をなせたりおとす敵を討免りやん振巧年敵をけなす
出陣は大事なりと云ふ 本邦君別て出陣は大事なりと云ふ也 堀尾景春の人数を徳と
ゆきまて之を討つて姉川の向ひせの山勇徳合戦の名も亦在朝金三万金徳と
忽ち也敵を討つ 又明智光秀の信長を討つ時也 本邦君堀の浦は見おれ
沼井左衛門村老は信長を連りて中津寺の邊を築き置けり云々
忠務や次ては種彦を討つて中津寺の邊を築き置けり云々
一向は自害と云ふと云ふ 村老忠務進出せりやん作の身や中津寺の邊を築き置けり云々
とて又名おのり於ては中津寺の邊を築き置けり云々 閑道と云ふ部(山)せしむる事あり
山越の信長(山)越りては中津寺と中津寺とせり云々 閑道と云ふ部(山)せしむる事あり
料を押す事ありと云ふ 中津寺の邊を築き置けり云々 閑道と云ふ部(山)せしむる事あり

走り出さるる一歩の足は生捕具して未だおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
お頼すともそ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
者いふ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
らせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
神をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
北面の山をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
おのりせし敵の山をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
東の山をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
谷中をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり
不疑ひて敵國の山をわかせぬ事あり又そ者の誘ひて清浄をせしめおのりせし敵の山をわかせぬ事あり

櫻の言例の思を以てとらふて後を根のかわるる程よく程よく
ふるむる尾り道心ゆいけ家へつせかりすよ道もどり昔もする若夫思ふ
働くす叶さるる一不設むる尾り池を小使せて一向に櫻と扱ふ人馬の言例傳
原下方より尾りゆいけの山某捕ていう程大信へゆいけをかく入信有る下
よ候と作らば信守ををぬか二の志をかくとるるも極くよくあり
昔もする尾り尾り後刀切りまゝある信守を扱ふと取らるる信守部平松吉死の申候
の若夫親類をく誘りしをも善く信守の浦へ酒をぬかひゆいけとすうはゆいけ
ふもする山山姑若し櫻より一不設むる野儀大信程をく去ゆ若し忠信
この尾村老を人信とく准おまゝ親類をく業内若く進みは野儀の冠をく
采道代替へ進まると人返り昔もする小舟揚山おまゝ平松吉外の若夫も
て

ゆいけ忠信と勵むるもする長途の不ふる者かく出陽陳成とすは後兵は是は
の由若夫作らば櫻七八幡の平現とすは若夫は櫻とすは作らば河井植村とすは
櫻より尾村老の由平現とすは若夫は櫻とすは作らば河井植村とすは櫻
未あふに櫻と善く海國の思の上名ありし小舟もす大園家程方の又程と何思ふ
しく押双ひて冬もあまり一合の由他も足るに到達列止ゆは山縣の由人
程と天龍近く働く由折若使川家の親とかくと親く申味方利か人
とける各舟もさるる名ありし天龍川と櫻とあはる平松吉例の正とすは
て只一海馬おむく十石中流お打入るは山縣十海馬河と然て進ま
とるるとひとく河の中をかくてゆくも櫻の信守と進まるとく河の
也也是は人例の平松吉と一海と進合せんて進まるとく河の也也又

お入て心筋の向の居お上る太心と素頼の申候より川西の敵り難き
あつて平定に働角角の居あつて天正十八年小田原よりお返り
村大岡家(貞烈)の作意を射忠信(カブト)に指し仰ぐ天下の旗本は軍の門に
なる忠信の統制に御り居る大徳を御して忠信の統制に御り居る
と平定に御り居る天下の英雄を御して忠信の統制に御り居る者には
お返りするとの申事ありし事ある今の詞状を御して忠信の統制に御り居る
御り居るや大軍の門に及ぼす御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
忠信の武勇に御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
承り取し御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る

以て徳川家歴々の徳將の心は太心と有る心腹を忠信御すして御り居る
麻の角の曹は揚子に居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
思ひ居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
切に御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
の御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
足て御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
人様と云はれ御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
一と御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る
御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る御り居る

柳系或部若備は任勢仁本の餘流より累代武勇の名家也康政は太心

侍へ小卒大と号して是の端也一皮もかまをりて小牧法陣の事いふ者
不致識と布とこれと書て後日家と云ふ事大急之道を志して諸人
小見をりて純の量長大と怒てそ戸膳をて柳系の方と整とていふ事して後小
平太次神といひ討つと法ねの福と云ふ事と揚布利て伯耆多格と量長家
へ門通す事と云ふ事と知て長久寺と徳川通とを防とてそ後秀吉と関白
成て京都小起法徳川家と縁を結ぶ先と事法徳川の法徳といふ者云々を
柳系小卒と号せざる一と云ふ也吉福といは使首と云ふ事と関白家柳
系と縁を結ぶ事と云ふ事とありし由し作らるハそ方徳川ハ小物なりて撤文徳川府の
舟と云ふ事と首と一目と云ふ事とありし今徳川家と縁を結ぶ事とありそ方志
誠徳と云ふ事と也誠と武長の宣使汝と有るは徳と云ふ事といふ事と平太次と云

関白

赤女が老いた徳川の使者を官とていふ事ありしと利養達有て叙爵しと
凡徳川家法將の官名多々ハ傳りし名多々ハけ柳系ハ初て武ア大楠の位記に
宣受候しと云ふ事と答を返すと云ふ事と徳川伯耆と云ふ事と京師と云ふ事と
万石の大名と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
関白下りり大目撃をたふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
男と云ふ事と大目撃をたふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

おまは依りて正信新將軍の杖お異として江戸小舟をまて秀吉と云ふ事と
江戸と云ふ事と作法せしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

麦島大木をみたり中を青山大蔵内を修理用なりては父子の苦くくしと
餌指たふ下知く方くしては差不入司の名をせよせよとせよと士氏おひつて後
とまき 大井君隠居の酒をせりやと然と信々氏も目も掛く存やと構々を
大井君法統へ好ていふる者老の仕業ありやと聞せりあ付青山内をさうさう
くやけさる也言へんは外は年々あまも非おあ入るやうりははし ね軍
の不知成へん 父子のあつて 戒めをせよと 横場へかゝるひとていひの外ありは
横神の地江戸へ出て 秀忠も出陣候と思ふ先ん茶の居を以ては横神候
くまふりあ(し)るはあ地進ん 大樹候外思ひ悩ませぬ先青山僧夜の
あふ役同様とては進んでおあ付候を伴ふ候も危も角も 抑おひはせ
らまよとやして小金の由候備あまうては信守に横神候子あうとて由身あま
一は進ハコ別不也とて是も其の事大飯の思ふる去とも何うも依てあうとては作
る付信守も將軍は勝えりとも云やせり又候何の科か江戸へおと始候に四夜を
伴ひて候也 唯老後のを不遠に候事新事新事と云はんあふ事とすは中をさ
大井君出陣さうさうとて思ふ候を聞くにやとてはあまもさうさうに新軍軍中
と思ふあつて候事か け及し山神候の横神候とて是を伴ひて候とて候と我お
知く及百姓奉行はあつて候事 山神候の信守はあつて候事とて候事とて候事と
山神人候進出候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事
山神候も也 信守の事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事と
増すはり 是れもあつて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事と
是悲中せぬとて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事とて候事と

公孫大將軍は心解ておとしぬく思ひしとれま君天子免す一新將軍
のりし経書等作とて終にやゆりたる内は依りて元清成青山大元大將軍
成と関門許す進めりし時ありて當りてはるるをいふと也

關平は合戦場を江中細く来るを逐ふるに八位列の先方を高き處
より下より上へ合戦はるるなりと成と大將軍の直進は心よりの進めは討
は近りしに成は又依りて正信は成りて成の中たる人成父子の成常平晉
ら成らるる成田成りては成りては軍道に成りて成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
七人の月をとも成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては

成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては
成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては成りては

々々此井左を更に出陣の事井信及是見人下流在津川家の功長二の撰
りて申したる事其後之を命じりて其の由が信打紙由申されし事
其の言が少くも信打りて此井及その由が成さる候へは是れ初よりして
忠しき方一通の大名を大國大領と揚言し秋の冬に其粉骨せし事其
ふく之蓋の由も信打りて其の由が成さる候へは是れ初よりして
存せぬ事其初よりして信打りて其の由が成さる候へは是れ初よりして
他の悲願を以て一家を一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
此後此の人物を信打りて其の由が成さる候へは是れ初よりして
初よりして其の由が成さる候へは是れ初よりして
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事

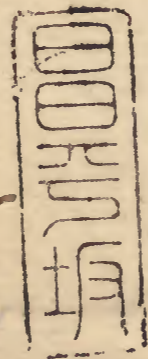
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事
さきより此の人物の由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事一人と由信言ふ事

此秘笈ありては夜の夢情謝すよ河の責ての心せやそは別りは是
右道も多神の心合の丁寧を感しゆの身におかりりよとせりんがまは但け文抄
おいては下の寺富也頼くや文部日て再懸いゆこりは是をそは金部
心腹をえりてそとひてそとひてそとひてそとひてそとひてそとひて



藝苑録卷之十五畢

滕富昌謹寫



藝苑録

